

アドラーとペスタロッチ

濱口三芳子 (高知)

要旨：現代の学校教育の基礎を築いたといわれるペスタロッチの直感に呼び掛ける教育思想は、どのような時代背景のもとで生まれ、その思想が社会にどのような影響を与えたのかを見ていくと共に、教育について強い関心を持っていた精神科医アドラーの思想と、ペスタロッチの思想を比較し、いくつかの共通点を見出した。ペスタロッチとアドラーの教育に対する考え方の共通点は、1) 学校は社会に貢献する子どもを作る場、2) 子どもの建設的な可能性に注目し、それを引き出すためのさまざまな方法を工夫した、3) 子どもの自治を重視した問いかける教育、4) 教育を通じて新しい社会をつくる、の 4 点にまとめることができる。共通点があるということは、アドラー心理学を教育実践に自然な形で活かしていくことができると言える。

キーワード：アドラー心理学、教育、ペスタロッチ、教育論、学校

“That much I saw soon, the circumstances make man, but I saw just as soon, man makes the circumstances, he has the power within himself to steer these in a variety of ways according to his will”

ALFRED ADLER Superiority and Social Interest p321, 1964

1. はじめに

筆者は中学校で家庭科の教員をしている。現代の学校教育の基礎を築いたといわれるペスタロッチ (Johann Heinrich Pestalozzi) の直感に呼びかける教育思想は、現代の教育に携わる私たちからすれば自明のことである。しかし、ペスタロッチが生きた時代は、現代とは大きくかけ離れた環境であったと考えられる。

ペスタロッチがどのような時代にどのような環境の中で生み出した教育思想が、今日まで受け継がれているものなのか、彼の教育思想がその時代の社会にどのような影響を与えたのかを知ることが、学校現場で子どもたちと関わる上で有意義なことであると考えた。

教育の実践家と精神科医という立場の違いはあるが、アドラーもまた、教育について強い関心を持っていた。ペスタロッチの思想を、アドラー心理学の視点から比較して見てみることで、今後の教育実践にも役立つと考えた。

2. ペスタロッチの生涯と時代背景

ペスタロッチは 1746 年にスイスのチューリッヒに生まれた。5 歳の時に外科医であった父を

亡くし、姉・妹と共に、母とお手伝いさんに育てられた。ペスタロッチはチューリッヒの近くのヘンク村で牧師をしている祖父のところによく遊びに行き、チューリッヒの子どもたちとヘンク村の子どもたちの境遇の違いに心を痛めた。チューリッヒの町の子どもたちは裕福でみんな学校に行ってお勉強しているのに、ヘンク村の子どもたちは貧しく、十分な学校教育を受けることができないまま働いていたからだ。ペスタロッチは、幼い心にこの人たちを救いたいと思うようになっていった。

1761年ペスタロッチは大学へと進み、はじめは祖父の後を継ぎ神学を学んだが、もっと人々を直接に救いたいと考え、弁護士を目指した。しかし、最終的には農業家となり、農民を救う道を選んだ。

1771年、チューリッヒ郊外の荒れ地を買い求めノイホーフと名付け、妻アンナと共に開墾し、農園を経営した。しかしその農園は数年後破綻する。また、1774年には、ノイホーフに貧者の学園、貧民学校を設立し、耕作と糸紡ぎをしながら教育を行った。しかし、学園経営は順調ではなかった。収容した子どもはそこを利用するだけして飛び出したり、大人は彼の悪口を言って子どもたちを呼び戻したりした。彼は人々の信用を失い、学園も失敗に終わり閉鎖することになったのである。

その後、しばらく文筆業に精を出し、1780年に民衆に向けて執筆した『リーンハルトとゲルトルート』がベストセラーになり、ペスタロッチの名は一躍有名になった。この著書では、民衆に、貧困から抜け出すための教育や生活の方法について、物語の形式をとって述べている。また、ノイホーフでどのような教育実践を行ったかを記した『隠者の夕暮れ』もこの時に発表している。

この頃のヨーロッパの時代背景としては、1760年代のイギリスで産業革命が始まっている。小さな手工業的な作業場が変わって機械設備による大工場が成立し、これとともに社会構造が根本的に変化した。1830年代以降は革命が欧州諸国に波及している。産業革命を経て初めて近代資本主義経済が確立した。これにより、貧富の差が広がった。その現象は、スイスにも波及した。ペスタロッチはその産業革命によって生まれた貧民たちを救いたいと考えたのだ。

産業革命によって生まれた貧富の差は、市民革命へとつながり 1789年からフランス革命が起こった。ナポレオンによってその思想がヨーロッパ各地に広まり、民主的な国家を作ろうという方向に社会が動き始めた。(表1)

1798年フランス革命政府の強力な影響の下で、スイス革命政府が成立した。スイスのシュタンツという街は、スイスが民主化していく上で拠点となった街であった。その当時の隣国フランス

年号	ペスタロッチ	時代背景等
1746	スイス・チューリッヒに生まれる	1760年代～1830年代 産業革命
1761	大学に進学	
1771	荒れ地を購入し、妻アンナとともに開墾。 ノイホーフと名づける。	
1774	ノイホーフに貧民学校設立	
1780	著書『リーンハルトとゲルトルート』 『隠者の夕暮れ』	1789年～1799年 フランス革命

(表1) 2 ペスタロッチの生涯と時代背景1

年号	ペスタロッチ	時代背景等
1798	シュタンツ孤児院設立 53歳 著書『シュタンツだより』	スイス革命
1799	ブルクドルフの小学校の教員に	
1800	ブルクドルフ学園設立	
1801	著書『ゲルト ルート 児童教育法』	
1804	イヴェルドン学園設立	1806年、1808年 フレーベルがイヴェルドン 学園を訪れる

(表2) 2 ペスタロッチの生涯と時代背景2

は、フランス革命後の民主主義の思想をヨーロッパ全体に広めようとしていた。シュタンツは、その政府軍に対する抵抗勢力の拠点となっていたため、フランス軍に攻撃され、シュタンツの市民に多数の死傷者が出て、同時に多数の孤児が発生した。

当時の文部大臣のシュタッパーは、孤児のための学校を開くようにペスタロッチに要請した。シュタッパーはペスタロッチの理解者であり、その著書を高く評価し、ヨーロッパ中にペスタロッチの名を広げる手助けをした人である。ここでペスタロッチが手がけた孤児院が、ペスタロッチの教育実践の始まりとなる。この時彼は53歳だった。

ペスタロッチは著作活動に専念していた時期も、思想家として社会改革運動を応援するような文章を多く書いていたため、彼に批判的な人たちから、足を引っ張られる形になり、孤児院もわずか半年で閉鎖されてしまった。その孤児院での実践を紹介したのが『シュタンツだより』である。

孤児院の閉鎖後、1799年にペスタロッチはブルクドルフという村の小学校の教員になり、そこで教科書や教材を作り始めた。

そこでの活動が認められ、1800年ブルクドルフ城に学校を作ることができた。これがブルクドルフ学園である。ここでペスタロッチは自分が考えた教育方法をメトーデと名付け、それを広めるために1801年に著書を発表した。その本が『ゲルトルート児童教育法』である。この本を読んだ様々な人が学園にやってきて、ペスタロッチの教育についての考えや方法を学んだ。こうしてペスタロッチの名はヨーロッパで有名になっていったのである。

しかし、この学園ではペスタロッチが理想とする教育ができなくなり、学園を去ることになった。

その後、1804年にイヴェルドン学園を設立する。この学園でペスタロッチは、教員養成や著述活動を中心に行った。フレーベルもこの学園を訪れ、ペスタロッチから多くのことを学んだ。フレーベルは、幼児教育の父と呼ばれ、世界最初の幼稚園を創設した人物である。このように、幼児教育の分野でも、ペスタロッチの考え方は、大きな影響を与えている。

フレーベルについては、『アドレリアン』第24巻第2号に吉田美由紀氏が執筆した『「アドラー心理学」と「フレーベル」共同体感覚の育成をめぐる』という論文が掲載されている。(表2) 一方その頃ドイツでは、1807年にフィヒテが『ドイツ国民に告ぐ』という演説を行った。

フィヒテは当時ベルリンに住んでおり、自分の国をナポレオンの占領下に置かれるという経験

年号	ペスタロッチ	時代背景等
1807		フィヒテ『ドイツ国民に告ぐ』を演説
1813	スイス初の聾啞学校設立	
1818	グランディー 貧民学校設立	
1825	著書『白鳥の歌』	
1827	ノイホーフにて死去	

(表3) 2 ペスタロッチの生涯と時代背景3

をする。この演説では、こうした自国の滅亡の危機を救うためには、ドイツを統一国家にするという必要性、そして、そのためには国民教育が必要であるということを述べている。このフィヒテの考え方は、ペスタロッチから大きく影響を受けている。フィヒテの死後、フィヒテの演説に感銘を受けたプロイセンの王ヴィルヘルム1世（のちの初代ドイツ皇帝）は、フィヒテに影響を与えたペスタロッチを訪ね、その後ドイツで国民教育を普及させた。こうして、ドイツは統一国家となり、ヴィルフェルム1世は初代ドイツ皇帝となった。このように、ドイツ帝国建国においてもペスタロッチの考え方は強い影響を与えているのである。

1813年にペスタロッチはスイス初の聾啞学校を設立した。1818年には年金を投げ打って、グランディー 貧民学校を設立した。貧民学校の設立はペスタロッチの長年の夢であったが、わずか1年足らずで経営難のため、イヴェルトン学園に吸収されてしまった。

1825年には最後の著書『白鳥の歌』を執筆した。この本はペスタロッチの教育論と自伝とで構成されている。

1827年、ペスタロッチは彼がその人生を歩み出したノイホーフで人生を終えた。82歳だった。(表3)

3. ペスタロッチとアドラーの教育論の共通点

このような時代背景の下、ペスタロッチが教育実践の中から見いだした教育論をアドラーと比較しながら見ていく。

(1) 学校は社会に貢献する子どもをつくる場である。

教育の目標について、ペスタロッチは「生きること、自己の地位において幸福であること、そして自己の境遇において役立つものになること、これが人間の使命であり、子どもの教育の目標だ。」^[1]と述べている。この目標は、アドラーの共同体感覚を育てるということと一致している。そしてアドラーは「小さいころの子ども教育というものは、共同体感覚を目標として、それを身につけさせるものであるべきだ。」^[2]と述べている。

ペスタロッチもアドラーも、学校を、社会に貢献する子どもを作る場と考えていたのだ。

(2) 子どもの建設的な可能性を引き出すことが重要である。

ペスタロッチは、人間には神から与えられた素質や能力が備わっており、保護と援助により良い方向に伸びていけると考えた。そのことを植物を比喩的に用いて次のように述べている。

樹木は

幼い時に保護してやり

幼いときに助けてやれば

地上から

まっすぐに

天に向かって伸びてゆく^[3]

アドラーもまた「大切なことは何が与えられているかではなく、与えられているものをどう使うかである。」^[4]と述べ、自分を受け入れ、備わっている能力をうまく使っていくことで幸福な人になれると考えた。

ペスタロッチもアドラーも、子どもの建設的な可能性に注目し、それを引き出すことが大切だと主張している。

(3) 子どもの可能性を引き出す教育方法の工夫。

ペスタロッチが見いだした教育の方法原理には次の4つが挙げられる。^[5]

①直感による教育

ペスタロッチは、シュタンツやブルクドルフでの教育実践から、「直感をもってすべての認識の絶対的な基礎」と考えるにいたった。直感は感覚印象から出発する。それゆえ教育においては、できる限り子どもの感覚に訴えるよう努めなければならない。これがペスタロッチの主張であった。

ペスタロッチの時代には、書物による教育、言葉による教育、暗記による教育が中心で、それも学習内容がばらばらに教えられていた。ペスタロッチはこれらの教育方法で教え込まれた知識は「死物化した空虚な知識であって生きたものにはなりえない」と考えた。

直感による教育は、事物による教育に結びついている。子どもの感覚印象に働きかけ刺激を与えるのは事物に他ならないからである。子どもは言葉で教えられるよりも、直接事物に接することで多くを学び取る。このようなことから、ペスタロッチは「事物を、すべて可能な限り多く、子どもの前を過ぎ去らせ、再び来させ、また行かせよ。踏み固めるな。彼にいつも見させ、聞かせよ」と言い、「言葉によって教えるよりも、いつも事物によって教える」ことが、子どもの教育にとって大切であると述べている。

②生活教育

ペスタロッチは、子どもの能力は、その「現実の実生活を通して」発達すると考えた。教育は子どもにとって最も近い、毎日繰り返されている生活から始まるのである。

③自己活動による教育

そして、子どもが活動することによって自ら解答を得るところに本当のものが身につくとも考えた。

④自然の教育

「自然の教育」には2つの意味があり、一つは、私たちを取り巻く自然こそが人間以上の教師であるという意味で、もう一つは、子どもの本性自然の発達に従っていく成就が最も自然であり、

かつ確実となるという意味だ。

アドラーもまた、「教材は興味深く、実用的であるべきです。数学—数学と幾何学—は建物のスタイルと構造、そこに住むことのできる人の数と結びつけて教えることです」^[6]、「子どもたちが手を膝の上で組んで、静かにすわっていなければならない、動くことを許されないような学校はもはやない」^[7]と述べており、生きた学習をさせたいと考えたペスタロッチと共通した考えを持っていたことがうかがえる。

(4) 子どもの自治を重視した問いかける教育

『シュタンツだより』のなかで、ペスタロッチは子どもたちに、彼らが直面すると思われるさまざまな命題を示した上で、彼らの「自由な判断」を求めたと報告されている。

その事例を紹介する。

別の町が戦火に見舞われたとき、ペスタロッチは孤児院の子どもたちに、戦災孤児の受け入れを提案した。彼らは即座に、「そうしましょう」と答えた。自分たちと同じ経験をした孤児たちに同情したのである。

子どもたちのうちに、好意的な情調と他者境遇や環境に対する共感性とが培われていることを確認した上で、ペスタロッチはさらに問いかける。「おまえたちが熱心に望んでいることを考えてごらん。それを望んでも私たちの施設にはそれほど多くのお金があるわけではないし、かわいそうな子どもたちのためにこれまでよりも多くのお金を得ることが確かなわけでもないだろう。だからおまえたちは、授業の代わりに、彼らのために働かなければならないし、食べるものも少なくなるし、さらには着るものも分けてあげなければならなくなるかもしれないよ」

そして、こうした不利益を引き受ける覚悟なしに、是と答えるべきではないと、ペスタロッチは締めくくったのである。

このような問いかけでもって、ペスタロッチは子どもたちに考えさせました。子どもたちは自らの義務や責任を問い直さざるをえなかったでしょう。^[8]

子どもの自治を重視した問いかける教育は、アドラー心理学に基づく問いかける子育てと重なっている。

(5) 教育を通じて新しい社会を作る

ペスタロッチは、貧しい人々の悲惨な姿を目の当たりにし、彼らをこそ救いたいと考えた。そして、「もし人間を幸福にしようと思うなら、人間の周囲の事情よりも、むしろ人間自身を指導し、教育し、導くべきである。」^[9]と述べている。

アドラーも、ロシア革命の現実を目の当たりにしてマルクス主義に失望し、政治改革による人類の救済を断念し、以後、育児と教育へと関心を移した。戦後のウィーンは荒廃し、青少年問題が社会問題化する中、アドラーはウィーン市に働きかけ、公立学校に多くの児童相談所を設立した。そして、「子どもが人生で出会うさまざまな困難を克服するためには、その子の関心や願いが育つよう勇気づけなければいけない」^[10]と述べている。

ペスタロッチもアドラーも、人々が自らの力で生きていけるようにするためには教育が必要だと考え、教育を通じて新しい社会をつくらうとしていた。

4. ペスタロッチとアドラーの教育論の相違点

ここまでは、ペスタロッチとアドラーの共通点を挙げたが、少し見解が異なる面も見られた。

ペスタロッチは、「すべての家庭の居間のなかに、真の人間陶冶の本質的な根本手段が全部そろっている、ということは議論の余地がありません。」^[11]と言っている。一方アドラーは「教師というものは、家族が持つ力の延長です。子どもが両親の手に負えないときも、教師の手がその子に届くときもあります。」^[12]と述べている。

さらに、ペスタロッチは、子どもの生活は、居間における母との生活から家庭の外へと広がり、再び家庭の母に返ってくる、と述べているのに対し、アドラーは、「母親との関係がたとうまくいかなかったとしても、そのことが致命的であるというわけではなく、後に父親との、あるいはそれもうまくいかなくとも友人らとの関係がうまくいくなればそれでいい」^[13]と考えていた。

ペスタロッチは、家庭教育や、家庭教育における母の役割をより重視し、学校教育の中にも家庭の精神を持ち込むという特色があるといえる。

ペスタロッチも、母親さえいればいいといったわけではなく、母親との関係においては「愛の芽」が芽吹き、父親との関係においては「義務」の感情が生まれると述べて、父親の役割も位置づけている。「父のパンを食べ、父とともに炉の前で暖をとる息子は、この自然の道において、子どもの義務の中に、彼の本質の祝福を見いだす」^[14]と述べている。

6. 学校現場への応用

これまで見てきたペスタロッチの考え方が、学校現場でどのように活かされているか紹介する。

まず第一に、ペスタロッチが、当時の教育では学習内容がばらばらだったことに賛成できなかったのは前に述べたとおりである。今では、やさしいものから高度なものへ、すでに学習したものを踏まえて次の学習をするようになっていく。このことを小学校家庭科と、中学校家庭科の内容を例にとって述べる。

例として小学校で習う調理操作は「ゆでる」と「炒める」の2種類であり、中学校ではこれに加えて、焼く、煮るといった操作が加わる。また、手縫いの技能としては、小学校では玉留め、玉結びから学習し、中学校までの学習で日常生活に必要な衣服の補修ができる技能がそろっていくようになっていく。

第二に、ペスタロッチは、「すべての学習は、その際に、やる気と喜びとが失われていると、一文の価値もない」^[15]と述べている。ここでは、生徒が教材と出会う際に、少しでも学習意欲が持てるように配慮していることの一例を紹介する。

中学二年生では、ティッシュボックスカバーを制作することにしている。先ほど出てきた、玉留め、玉結び、並縫い、返し縫い、まつり縫い、ボタン付け、スナップボタン付け、の全てが実習できるようになっているため、作品自体を自由に選ぶことはさせられない。しかし、生徒に自分で選ぶことのできる要素を取り入れるようにしている。この作品の場合は、フェルトや、リボン、刺繍糸の色である。そして、余ったフェルトでアップリケなどの装飾も工夫し、オリジナル作品となるよう設定している。また、注文した材料が届いたら、箱からそれぞれに配るのではなく、色ごとにグラデーションになるように並べてから、自分のものをとるようにしている。経験の豊富な先生から、「生徒が喜ぶ方法」として教えていただいた方法である。制作への意欲があがるとともに、これからクラスみんなで完成に向けて協力していくことへの意欲付けとなって

いる。(図1)

第三に、授業で実物を用いて、生徒の感覚印象に訴えかけるのはとても効果的な手法である。しかし教室に持ってこられないものもある。

その場合の授業展開で工夫していることを挙げる。

中学校の家庭科では、中学生になるまでを振り返りながら、幼児について学習する領域がある。自分たちが生まれた時どのくらいの大きさだったのか、今と比較して実感させたいところだが、生まれたばかりの赤ちゃんを教室に連れてくる、というのは無理がある。そこで、生徒に提示できることとして、まず、出生時の身長・体重といった数値がある。しかし、これだけでは生徒がイメージをふくらませるには不十分である。次に、写真を使うことが考えられる。数値と併せて用いることで、「小さかったんだよ」ということが伝わりやすくなる。さらに、生徒がリアルに体感できる工夫として、実際の新生児の時、身につけていた衣服などを使う。これらを体に当ててみることで、赤ちゃんの小さな体をより具体的に感じるができるのである。(図2)

7. まとめ

ペスタロッチの主張した教育思想は、現代の日本の学校教育現場でも根付いている。そして、ペスタロッチとアドラーの教育に対する考え方には、たくさんの共通点が見られた。まとめると「1. 学校は社会に貢献する子どもを作る場である。」「2. 子どもの建設的な可能性に注目し、それを引き出すためのさまざまな工夫。」「3. 子どもの自治を重視した問いかける教育」「4. 教育を通じて新しい社会を作る」の4点である。共通点があるということは、アドラー心理学を教育実践に自然な形で生かしていくことができると言える。

アドラーの教育現場での実践についても見ていくと、ペスタロッチの教育思想との関連がより深く考察できたと考えられる。また、教育はこれからの国家を創っていくものであるので、国家と教育についても考えていきたい。

8. おわりに

家庭科は、生活に関する実践的・体験的な学習活動を通して、基礎的な知識や技術を習得したり、家庭の機能について理解し、生活をよりよくしようとする能力と態度を育てることを目標とした教科である。

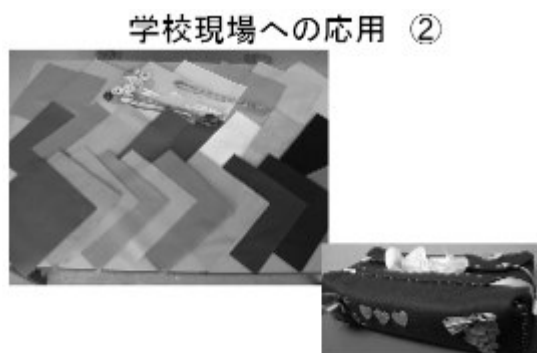


図1



図2

衣服も食事も、一から自分で作るよりはずっと安い値段で、簡単に物が手に入る世の中で、その技能を身につけさせることの意義が話題になることがある。著者はこれまで、生徒が自分で身の回りのことができた方がいいし、その時々状況によって、手作りしたり、買って来たり、いくつかある選択肢のなかから賢く選ぶことのできる消費者になってほしい、そのために知識や技能を身につける必要があるという考え方をしていた。

しかし、ペスタロッチのことばに出会い、家庭科に対するとらえ方を変えることとなった。

母がその子の目の前で編む靴下は、子どもが市場で買うとか、それがどこから彼の手に入るかも知らずに、はく靴下とは、子どもにとってまったく違うものとなる。子どもに何らかの楽しみを与える母の愛の感銘は、永遠の崇高な内的生命が受ける感銘だ^[16]

ペスタロッチは、母が子どもの目の前で示す行為や事実が子どもを育てると言っているのだ。生活の技能は、単に自分が自立して暮らすためのものではなく、子どもに愛を示すためのものだったのである。子どもには手をかけ、時間をかけて、愛情を示して育てるものであって、それがとても尊いことだということは、母になる人はもちろんであるが、その周りの人々もそう思っていないければ、そういう子育てはできない。

ペスタロッチは「環境が人間を作り、人間が環境を作る」^[17]と述べている。家庭科という教科を通して、生活を大切に、子どもを慈しんで育てることが人間の大切な仕事であるということをもみんなが認識している社会にしていくことに貢献したい。

最後に、ペスタロッチの墓碑に刻まれている言葉を紹介する。

ここにハインリッヒ・ペスタロッチ眠る

1746年1月12日チューリッヒに生まれ

1827年2月17日ブルックにて逝く

ノイホーフでは貧者を救った人

「リーンハルトとゲルトルート」では

民衆に教えた人

シュタンツでは孤児の父

ブルクドルフとミュンヒェンブーフゼーでは

小学校の創設者

イヴェルドンでは人類の教育者

人間、キリスト教徒、市民

すべてを他人のために、己には何もかも

祝福あれ、彼の名に^[18]

引用文献

1. 片山忠次：ペスタロッチ幼児教育思想の研究 法律文化社、1984, p240
2. G・S・J・マナスター, G・ペインター, D・ドイッチュ, B・J・オーバーホルト編, 柿内邦博、井原文子、野田俊作訳：アドラーの思い出 創元社、2007, p152
3. 前掲 1, p78
4. 岸見一郎：アドラー心理学入門 KK ベストセラーズ、1999, p100

5. 前掲1, 第4章
6. A・アドラー著、岸見一郎訳：子どもの教育 一光社、1998, p155
7. 前掲4, p38
8. 光田尚美：思いやりの心を育てる道徳教育考—ペスタロッチの心情陶冶論に着目して—
The Journal of the Department of Social Welfare, Kansai University of Social Welfare No.
12, 2009.3, p114
9. 前掲1, p107
10. 前掲6, p155
11. 前掲1, p107
12. 前掲2, p152
13. 前掲4, p43
14. 前掲8, p113
15. 前掲1, p180
16. 前掲1, p232
17. 前掲1, p302
18. 小澤周三・影山昇・小澤滋子ほか：教育思想史 有斐閣, 1993, p97

参考文献

- 1 片山忠次著：ペスタロッチ幼児教育思想の研究 法律文化社, 1984
- 2 長尾十三二、福田弘共著：ペスタロッチ 清水書院, 1991
- 3 小澤周三・影山昇・小澤滋子・今井重孝 著：教育思想史 有斐閣, 1993
- 4 W. ボルト W. アイヒラー著 小原芳明訳 フレーベル生涯と活動 玉川大学出版部, 2006
- 5 日本ペスタロッチー・フレーベル学会ホームページ, 2011.10.06

更新履歴

2018年11月20日 アドレリアン掲載号より転載